備北 ―はじめての出荷を終えて

〒 井 真治

先日、クリ、シイタケ、ダイコンを、ほんの少しですが出荷しました。ぼくにとっては、百姓を志てのはじめての出荷販売であり、ちょっぴり感傷めいたものを心に残しています

これからも、生活のためとはいえここでとれたものを出荷販売してゆかなくてはなりません。出荷と販売に関する現実的な問題について、ぼくは次のように考えています。

まず、その一つは、出荷に際してL・M・Sなどの規格分けはしたくないということです。現在卸売市場に出荷し、高収入をあげるためには厳密な規格分けを要求されます。その規格分けの理由は、いろいろと言われているようですが、結局のところ、こうした規格分けが、価格操作に悪用され、決して農家の利益につながらないのではないかとぼくは思うのです。ダイコンやトマト、キュウリなどがその大きさによって区別されるのはおかしいのではないでしょうか。太くても細くてもダイコンはダイコンであり、むしろ太いダイコン、細いダイコンは料理の際に工夫して食べわけることが出来るというよい点さえあると思うのです。

ぼくとしては、そうした消費者の頭を使って、料理するという行為を期待さえして　あえて規格分けをせずに送りたいと思います。また、規格分をしないで出荷するのは卸売市場では不利なのでやはり直売という方向をとることになるわけです。

次には価格の問題です　今の時点ではっきりしておきたいのは、いわゆる「安売」では決して問題の解決にはならないということです「安売でスーパーなどの資本と"対決"してみたところで結局敗けるだろうと思います。そればかりか　ぼくらが安売することは　他の農家の生産物が資本によって不当に買いたたかれるおそれもあるし、たとえぼくらの安売が成功したように見えても、そのしわよせは　弱い農家におしつけられるばかりで、何のための安売か　わからなくなります。

今のところ価格は、店頭の販売価格を参考にして新鮮さや、出来の良否によって決めたいと思っています

最後に真売について考えていることをまとめてみたいと思います できるだけ今までの販売ルートには頼りたくないと思います　考えられる直売の方法として　(1)青空市場方式　(2)個別的な売歩き(引き売り)(3)個別の消費家庭との契約販売方式の3つがあると思います・どのやり方にも一長一短があるので　別にどれでもよいわけですが生産農家と消費家庭の新しい結びつきを創り出したり　共同体運動としてのRRをしたりしていく上からは　(1)と(3)の混合がよいのではないかと考えています　つまりまず10軒なら10軒の家庭と出荷可能な作物に関して取決めをしておき　優先的にそれらの消費者に届けて出荷に余裕があれば　青空市場で販売するなり　無料で配布するなりしてはどうかと思うのです

こうしたやり方を実現するためには　販売にたずさわる人もほしいし　備北の場合、生産者＝百姓だけでなく各地に散らばって販売や広報などを担当する人たちを含めて『共同体』と名のりたいと思います。

（追記）

なにしろ、次から次へといろんな問題が、でてきて　わからないことだらけです。ぼくの考えついたことですから誤りがあるかもしれません。誤りがあったり　もっとよい考え方や方法があったら、ぜひ、おしえて下さい。いつも貴重なことを与えてもらうばかりですみませんが……。　71.10.30

農業問題の現状と共同体 (1)

尾関 弘

はじめに

われわれは備北の地で「農業共同体による社会変革の試み」を始めたのであるが共同体について語ることはあっても、「農業」について語ることは余りにも少なかった。加えて、農業を知らない農業諸美主義者が若い都会人に多く、その傾向はかつての農本主義、重農主義にも似たロマンチシズムにいたずらに運動を歪めている。

明確に社会主義運動として備北を考えている私にとって、それなりに今の日本の農村と農民と農業が置かれている状況を分析検討す

ることは、われわれの運動にとって必須のことのように思う。

食糧管理体制を中心として

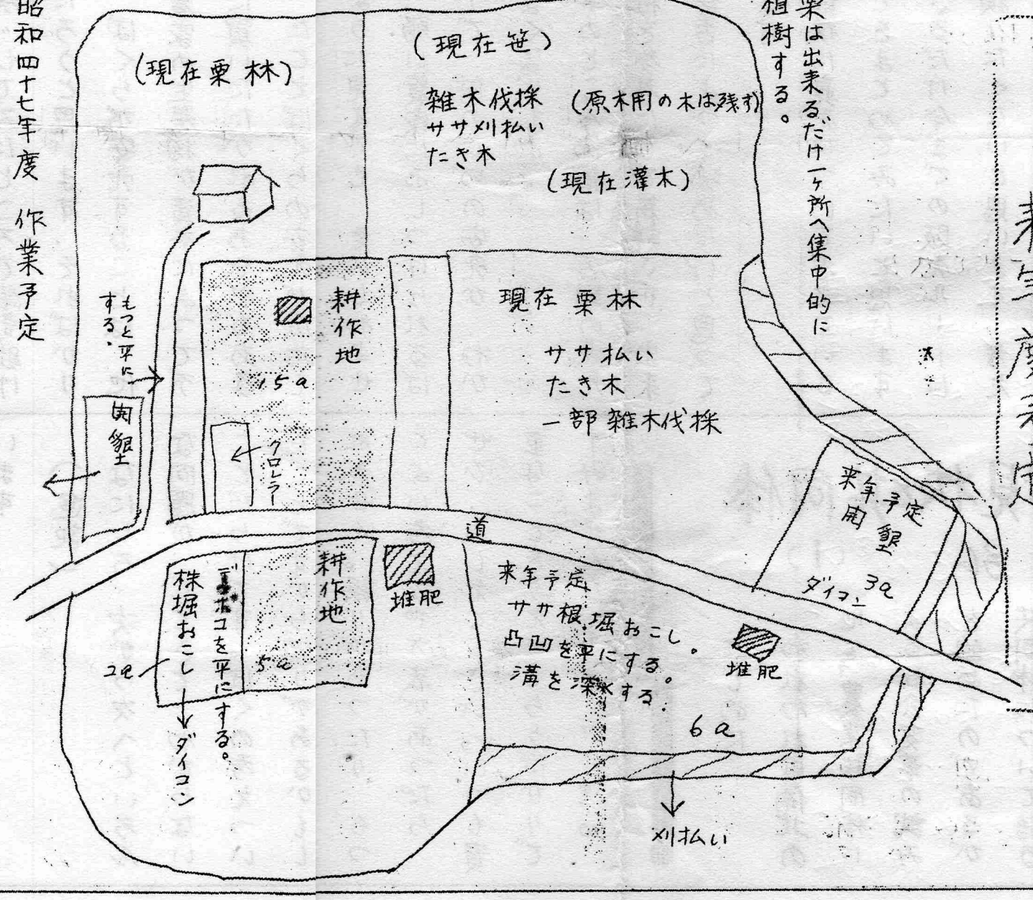
まずわれわれが「農村を考えてみて、すぐに頭に浮ぶことは、自民党の栗田である農村、自衛隊員、機動隊員の供給地（自衛隊員の70%は農村出身である）である農村等―現在の保守反動政権の基礎、母体たる農村の現状である。そしてもっとも具体的には、政府と農村の癒着は食糧管理体制（以下食管制と略す）によって、生産者米価を守り、農業経営を保護しているかに装われているが、実は今日の農業制策の反動化と農民運動の停滞の大きな原因を作り出している。農民の7割以上が兼業農家、即ち農業外収入によって生活を支えている日本の農業の現状にあって、食管制によって保護（？）されている農民は、全農民の2割にも満たない富農（15ヘクタール以上の大土地所有者）に限られている。

昔、「百姓は気楽なものよ、年に3ヶ月も働きゃ良い」といわれたのは、稲作中心の食管制の作り出した矛盾である。そしてごく一部の富農だけが、この食管制のもとに気楽な生活をしているといえる。

政府による米の緊急増産計画に基いて、米の増産に協力した多くの農民は今、かつてない困難に直面している。それは米の「作過ぎ」による減反政策の嵐がやってきたからである。これはまさに食管制の階級性を暴露する結果になった。即ち、食管制に守られているものと思い込んで米作一本に　込んできた多くの農民が「減反」「米の自由化」の危機を迎えてはじめて、食管制は一部富農と権力者の利益を守る道具であって大多数の農民にとっては、農民を政府による農民抑圧体制に押込めてきたことに気付いた。農民は食管制という百年の夢から覚めて、即ち政府権力とのはっきりした訣別のもとに農業経営をたてるべきである。米作農民と政府との蜜月は終った。後に残ったのは減反政策に苦しむ農民と、肥った富農どもである。

農協を中心とする農民運動家が今「食管制堅持」を叫んで陳情を繰返しているが「今さら……」である。かつての栄華と幻ばかりを追回しても仕方がない。ブルジョワ化した一部の富農を除いて、農民は一体となって、工業国日本の農民切り捨て政策と闘わねばならない。

現在の備北農場の状況と来年度予定



昭和四十七年度　作業予定

二月下旬～三月下旬―シイタケ原木伐採

三月上旬～四月下旬―シイタケ種菌

三月中旬～五月―畑の肉舗

四月上旬～―春野菜の播種

三月中旬―鶏舎建設

八月上旬―秋野菜の播種

トラクター貯金中間報告

10月29日現在

9/30	積立金	33,900
10/3	大根間引き菜販売	300
/16	秋山氏から	2,000
/18	クリ販売（吉條）	1,000
/21	田村氏から	4,000
/23	大根販売	800
/23	大根シイタケ販売	400
/23	大根シイタケ販売（大阪）	2,500
/28	大根シイタケ販売（田村氏）	1,500
合計		46,200

冬季キャンプへのおさそい

――新しいとりくみのために――

＊　＊　＊

第一回三月、第二回五月連休、第三回夏休み長期、第四回十月収穫のキャンプを経て、トラクター購入、秋には数はわずかながら、クリ・ダイコン・シイタケの出荷など、備北開拓共同体もゆっくりと一歩を歩みはじめた。いよいよ来春からは、今井真治さんをはじめとして数名が常駐し、実際に共同生活を行ないながら、社会変革をめざす農業共同体建設にのりだそうとしている。

全国各地からの参加者総数100名にものぼり、約1ヶ月半の間にぎやかに楽しくかつエネルギッシュに行なわれた夏季キャンプは、参加者各自にそれぞれの問題を投げかけただけでなく、備北共同体のこれからにも多くの問題点を残し、その意義は充分に評価されるべきだといえるだろう。しかし、参加者数が多すぎ、また期間もバラバラで、ミーティングを深化させることができず、実際の開拓での生活に対して一時的なお祭騒ぎにすぎず、また日常性からの逃避、共同体見学・実験的入体等との批判もきかれた。今までに行なったキャンプの経験をもとに、実際に備北で共同生活・集団農耕を続け、その収穫物の流通・販売までを含めた構想を実現していくために、今、新しいとりくみのためのキャンプが必要なのではないだろうか。

「冬季キャンプへのおさそい」としては、いささか気負いすぎたかもしれないけれど、以上のようなことを考えて、個々人の直接的かつ創意的な備北へのかかわりを前提とした、ミーティング中心のキャンプを提案したい。

日数…一週間くらい

場所…備北開拓がいいと思う。（たとえ雪の中にうもれていても）どうしても必要な人数確保も無理なようなら、大阪でも。

期日…①お正月　②一月末　③二月末（①②③案のうち都合のよい人が多いとき）

まず、参加希望者を募って、そのなかで詳しく相談したいので、十二月五日まで（くらい）に左記へ、封書で連絡をとって下さい。

東京都世田谷区下馬五―二八―五
中山方　大原　みち代

11月例会は28日（日）デス
議題「日本の農業問題の現状と共同体」
時間　午后一時より
場所　守口市民会館

あとがきにかえて!!!

備北開拓共同体運動と直接的にかかわり、運動を担っていこうとする人たちのミニコミとして、「コミューン往来」の間借人第一号、我が「備北だより」が登場した。

「生産―生活―自発―創意―連合」を「備北五原則」と考えているというSさん、備北入りを「現代版ナロードニキ運動の出発」というHさん、備北で「自然農法」を試めそうというKさん、などなど。また、「よりよい備北とのかかわり」を求めて、備北常駐より教育面での共同体を自分の手でやりはじめることを選んだTさん。いろんな人たちがいろんなやり方で「備北」を背負っている。

「備北だより」のいいだしっぺになってしまった私は、このたよりで何をしたいのか―①地域的・物理的条件から、備北が孤立してしまわないように、他のグループ・運動体などより多くの人たちとの連合。②流通・販売面での消費者等へのアピール。③共同体が陥りやすい閉鎖性・停滞状態を打破するために、自己の検証と発表。以上の三つにまとめられると思う。

私たちは、今こそ、これまでの読書・勉強・議論・夢想等を実現・体現しようとしているのである。

「備北だより」第一号に次の詩が送られている。

月刊キブツ

東京都港区赤坂二の五の七朝日ビル　日本協同体協会。

▽九月号内容▽
第三回日本の共同体話合いの会報告、他。

われらの且つ読み、且つ議論を聞わすこと、
しかしてわれらの眼の輝けること、
五十年前のロシアの青年に劣らず。
われらは何を為すべきかを議論す。
されど、誰一人、握りしめたる拳に
卓をたたきて、
'V NAROD!'と叫び出ずるものなし。
ここに集れるものは皆青年なり、
常に世に新らしきものを作り出だす
青年なり。
われらは老人の早く死に、しかして
われらの逐に勝つべきを知る。
見よ、われらの眼の輝けるを、また
その議論の激しきを。
されど、誰一人、握りしめたる拳に
卓をたたきて、
'V NAROD!'と叫び出ずるものなし。（はてしなき議論の後に　1911.6.15.啄木）